

であった。子宮筋腫を病理学的に分類しスキャン像を検討すると腺筋腫例では病巣部に一致した比較的淡い集積、ライオミオーム例では前者よりも強い充実性の集積を認め、混合例では両者の特徴を合併している像を得た。ラジオオートグラムでは、腺筋腫例では均等の分布を得た。さらにライオミオーム例で正常子宮筋に比してほぼ1.5倍の筋腫核に放射能を認めた。一方腺筋腫例では、ほとんどその差は認められなかった。

### 35. $^{201}\text{Tl}$ -chloride による 腫瘍シンチグラムの検討

中島 哲夫 角 文明  
砂倉 瑞良  
(埼玉県立がんセンター・放)  
田部井敏夫  
(同・内)  
佐々木康人  
(聖マリアンナ医大・3内)  
永井 輝夫  
(群馬大・放)

$^{201}\text{Tl}$ -chloride による 腫瘍シンチグラフィーの臨床的意義を、特に肝癌、甲状腺癌、肺癌について検討した。

方法と対象: 日本メジフィジックス社製の $^{201}\text{Tl}$ -chloride 2 mCi を静注し、10分後より病変部のシンチグラムをガンマカメラを用いて撮像した。対象は、原発性肝癌3例、転移性肝癌6例、甲状腺癌7例、肺癌4例、腎癌2例、良性疾患6例の計28例である。

結果: 肝癌については、肝スキャンと対比し、S.O.L. への $^{201}\text{Tl}$ の集積を正常部と比較すると、原発性肝癌では全例に正常部より強い集積が見られ、転移性肝癌ではいずれも正常部より少ない集積を示した。両者の鑑別診断の可能性が示唆された。

甲状腺癌では全例に陽性描画が得られたが正常部より強い集積を示したものは無かった。肺、骨、

脳などへの遠隔転移も良く描出された。甲状腺腺腫、慢性甲状腺炎各1例では強い集積が見られた。

原発性肺癌4例でも陽性率は100%であったが、 $^{67}\text{Ga}$ による腫瘍スキャンと比較すると、腫瘍/B.G. 比が低いこと、縦隔病変において胸骨による放射能吸収によると思われる False negative があること、心影と重なる病変は描出困難であることなどの点でガリウムよりも劣ると思われた。しかし、検査が短時間で終了し、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$  製剤によるイメージングを引き続き行なえることは臨床的に有利であった。

### 36. 大腿四頭筋拘縮症例の $^{201}\text{Tl}$ ・筋スキャン

鈴木 良彦 宮石 和夫  
細野 紀一 前原 康延  
井上登美夫 永井 輝夫  
(群馬大・放)  
小泉 慶一  
(同・整)

下肢の筋を直接描記し、病巣の広がりを観察する目的で、大腿四頭筋拘縮症5例、および対照として下腿正常者3例、両下肢に強度の浮腫を伴った1例の計9例に $^{201}\text{Tl}$ による下肢筋スキャンを施行した。拘縮症例は、病巣が両側性のもの3例、右側のみのも2例であった。スキャンに際し、下肢への集積を良くするため、あらかじめ約15分間の階段昇降運動を行なった後、 $^{201}\text{TlCl}$  2 mCi を静注、投与後5分より撮像した。

両下肢浮腫を伴った症例を含めた対照群では、両側下肢に均等で、かつ十分な集積が認められた。一方、病巣が片側性の拘縮症例では、患側において、病巣の広がりに一致しての明らかな取り込みの減少が認められた。また、両側性拘縮症例では、両側下肢全体に集積低下がみられ、左右を比較してみると障害の程度がより強い側に、より強度な取り込みの減少が認められた。このような左右集積差を比較するため、大腿部に関心領域を設定し、左右大腿部総カウント比をみてみると、